

# 西宮市立郷土資料館ニュース



資料館ノート

## 第4回特別展「たがやす、まつる。」

(平成元年8月5日→8月26日)

西宮市立郷土資料館では、現在約2000件4000点を超える民具を保管している。これらの資料は、かつて西宮市教育資料室や文化課が収集したものを母体とする。当初教育資料室では、学校教育における歴史・民俗に関する実物資料の活用を模索し、収集した資料を一定のテーマのもと、児童生徒を対象に展示し、その活用を試みた。これらは「教育資料展」、「兵庫県下の歴史展」、「ふるさとの生活用具展」に結実している。また、教育委員会文化課においても、昭和52年より民具の収集を開始した。現在所蔵している資料のうち、名塩紙漉き用具や山口町竹細工関係資料などはその収集作業の成果である。

これらの資料は、一括して郷土資料館に引き継がれることが昭和58年に決定し、同年より収蔵に先立つ分類整理作業が開始された。この作業は奈良県立民俗博物館をはじめ数館にその整理方法を学び、『民俗文化財の手びき』（文化庁内民俗文化財研究会編 昭和54年刊行）の分類基準を基本として行われ、現在も継続している。また、その後も資料の収集作業は継続しており、昭和60年7月に郷土資料館が開館してから現在までも約1000点にのぼる資料の寄贈がありその半数以上が民具である。

今回の特別展では、現在までに収集した民具のうち、稲作に関する諸道具を重点的に取り上げ、寄贈者への報告とお礼を兼ね展示することとした。西宮市はかつていくつかの伝統産業が所在した地域として知られるが、この地の生活の基本をなしたのは農業、とくに稲作であったことは自明である。農具には、農作業に従事した人々の工夫が顕現し、農作業の季節感是人々の生活のリズムに深い影響を与えた。今回の特別展では、農家の生活の節目で行われる「年中行事」にも注目し、手順よく行われた農作業と年中行事の実態から、当時の人々の暮らしのリズムその精神的世界を垣間みたい。展示内容は、原則として水稻耕作の手順に従い「田植え」「水やりと草取り」「収穫」「藁と米」の小テーマごとに農具を配置し、さらに関連資料をもとに「田畑で着る」などの展示も試みる。さらに民俗調査の成果をもとに、農作業や季節の節目に年中行事の資料を配置し、農業を基本とした生活を、総合的に理解できるよう配慮した展示を試みたい。

これらの展示は、資料を寄贈いただいた皆さまと、収集、民俗調査に協力下さった方がたの成果によるものである。ようやく整理された農業関係資料から、報告発表していきたい。

## 大正3年のワリコと心願講・長生講

井 阪 康 二

昨年の夏に下大市農会より、心願講と長生講の講を行う時に使用するワリコ（弁当箱）の寄贈を受けたので、2つの講について紹介したい。

ワリコを入れた箱の蓋の裏に

大正三年五月求之

世話人 高木 久右衛門

松本 竹蔵

小島 岩蔵

久保田常蔵

と記され、他の蓋には施主としてワリコを寄付した人の名前が書かれている。

下大市では心願講が行われる時は、村全体が仕事をせず休みとなった。そして、ヤド（講をつとめる家）は参ってきた人々に、おひつを出して自由に御飯を食べてもらった。それが大変であること、この日、竹の皮に御飯を包んで、村の青年団の所へ持って行ったが、竹の皮に包んで出すのもどうかということで、ワリコを買ったそうである。しかし、あまり使われなかったようである。

### 心願講

心願講は山城国の柳谷観音（現長岡京市、本尊十一面千手千眼観音、境内には空海が独鈷で掘りあてたと伝える泉があり、眼病に靈験があると信仰されている）を祀り、元治2年（1865）に上加茂村（現川西市）の坂本氏が発起人となり作った。そして、坂本氏が講元となり、川西市、池田市、宝塚市、西宮市、尼崎市、伊丹市、芦屋市、神戸市東灘区まで講を広めた。正式には摂津加茂組心願講と呼ばれている。

1月17日にハッコウ（初講）といって講元で、柳谷観音、弘法大師、西国三十三カ所観音のオカケジク（御掛け軸）三幅を掛けて祀る。17日は柳谷観音の命日である。100人からの人が参る。

この日、各村の世話人が自分のすいた日を

とっていき、各村の講がつとまる順番を決める。

講をつとめる家をヤドといい、村の世話人が講員にヤドをたのみに行くと、ホトケさんの命日が何日であるからと引き受けてくれるので、その日をとっていくということになる。

1月は初講だけで、2月から4月の初めの間（農閑期）には講は村々を回る。オカケジク等の講道具を長持に入れ、カタビキ（荷車）にのせて運ぶ。ヒキアイといって、講をつとめた村と次に講をつとめる村が、村と村の半ばでその道具の受け渡しをした。

講のおつとめは3幅のオカケジクを掛け、御飯等を備え、午後1時から4時まで行われる。導師1人とカズトリ（回向、念仏の数をとるおつとめの進行役）1人を中心に、回向が11回、念仏240回と御詠歌をあげる。これを一座といい、二座つとめる。参ってきた人は20人位で持つ大きな数珠を回す。回向と念仏は鐘をたたき、御詠歌は参った人全員で拍子木をうって唱える。拍子木は加茂のキョクウチといって、加茂組心願講独特のうち方である。

各村々から参ってくる人が多く、多い時には100人からあった。参ってきた人には御飯がふるまわれた。御飯は講のおばあさん達が用意する。ナナチャメシといって、大豆を炒って米といっしょに炊きこんだ御飯を出したこともある。菜はコンニャク、千切り、人参、牛蒡の炊いた物を御飯といっしょにワリコに入れて出した。

講の費用はおばあさん達が御飯用に、村の各家から1升ずつ寄付してもらった米が、40軒から集まるので余り、これを売る。また、商売人が酒等いろいろな物を供えてくれる。酒もそれ程いらないので、飲む人に残った酒は定価より安くでわけた。それらのお金が講の費用になった。

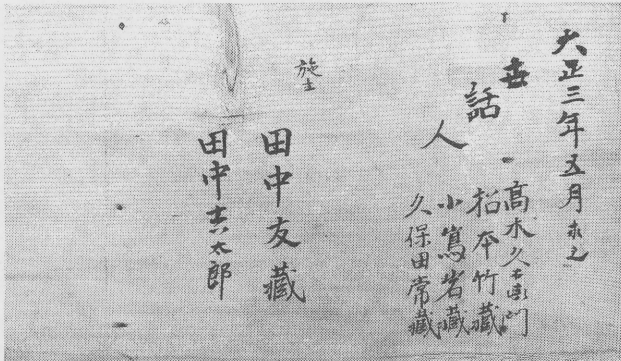


写真1 供養箱の蓋の裏

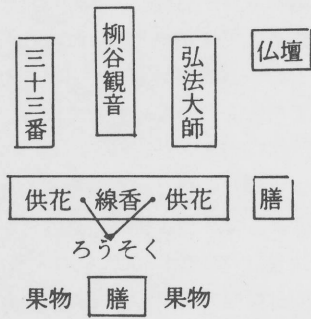


図1 下大市村の観音講



写真2 心願講と長生講の講を行う時に使用するワリコ

講が各村を回って、4月13日までにもう一度、講元で講がつとめられる。これをゴマンザといい、講がしもうた(終わった)という意味である。おつとめをしてから、お賽銭等の会計報告があった。

ゴマンザをつとめてから、4月13日に講参りといって、加茂組心願講の皆がオヤマ(柳谷観音)へ参った。500人程の大勢が参るので、この日は他の講が参ってくるのをお寺が止めていた。

阪急京都線長岡天神駅から歩いて参る。その昔は淀川を舟でのぼり、大山崎で降りて参った。大山崎からちょうど2里(8km)の所にオヤマがあり、当時はオヤマの宿に泊った。

講参りは4月13日だけで、講としては他の月のオヤマの命日(17・18日)には参っていない。お寺が命日にも参って欲しいということで、昭和30年頃から講として命日に月参りをするようになった。

なお、講にはこのように2月～4月まで各村を回る講と、村の中のみで毎月講員の家を順番に回ってつとめる講の2つがある。

下大市では心願講と観音講は別々に講をつとめていたが、講のメンバーが同じなので、約10年前にいっしょになり観音講として、今も毎月つとめている。

加茂組心願講は講元がようつとめなくなり、また、各村でもヤドをつとめてくれる家

がなくなったので、昭和61年に解散した。

#### 長生講

長生講は嘉永元年(1848)に生瀬村の人が発起人となり、能勢妙見山(現能勢町、妙見菩薩を祀る)を信仰する徐災招福子孫長久を願う講である。

毎年2月10日に大講の初座がつとまり、この日は各組長を初め100人程の人が参る。これが終わってから各村を順番に回る。

下大市では30数軒の家が講員で、昭和7年頃より始められた。各村を順番に回る講は講員の中でも、その年の仏日(先祖の命日)のある家がトウヤとなり、講をつとめた村から持ち回りされている厨子を受とりつとめる。下大市は2月に1回だけつとめる。

講のために精進料理をトウヤが作り、当日は他村(伊丹市、宝塚市、川西市、尼崎市)から参ってくる人にもふるまわれた。この日にワリコが使用された。参った人は酒やお金を供える。講の費用は講員が負担した。

毎年4月13日に講員が皆で能勢妙見山へお参りした。

この講もおこなわれなくなってから、20年程になる。

伝承者 小西繁雄(大正元年生)

松本武一(明治34年生)

参考文献『下大市物語』『下大市の民俗』

#### 寄贈資料一覧

1988年：豆塗椀・黒塗膳など35点(阪倉一郎)、1989年：シメナワ・ワカミズのオシメと稲穂(小野秀雄)、公智神社のシメナワ2点(下野良平)、児童徳性考査問題其の一～其の四など教育関係資料32点(南波松太郎)、

旅館柳谷玉屋手ぬぐい・御法扇(上山君子)、初誕生時の草履(木村昌弘)、策2点・餅搗きの竈・蒸籠3点・餅箱5点(池田治)

ご寄贈ありがとうございました。

(1988年10月～1989年5月、敬称略)

#### 目次

##### 資料館ノート

第4回特別展「たがやす、まつる。」……1

##### 収蔵庫ノート

大正3年のワリコと心願講・長生講

(井阪康二)……2

第4号の訂正：4頁右39行 動熊→動態

寄贈資料一覧……4

表紙：馬場孝治郎氏寄贈の名塩紙印判

西宮市立郷土資料館ニュース第5号

発行 1989年7月1日 西宮市立郷土資料館

〒662 西宮市川添町15番26号 TEL0798-33-1298